



中46・47回 昭和17年度入学時のクラス写真
(中47回・旧職員 小沼三郎氏蔵)

戦時下の土浦中学生17

～中学46・47回、戦争に苛まれた学びの日々1～

中46・47回生は、同一学年で、卒業年度が違う学年です(入学は1942(昭和17)年4月、卒業は46回が1946(昭和21)年3月、47回が1947年3月)。今号では、2017(平成29)年12月に、高21回松井泰寿・鴻巣茂が、中46回吉田義昌から伺った、戦中から戦後にかけての、氏の日々を紹介します。

引用文中の【 】内は筆者による注記です。

入学試験

1942(昭和17)年3月22日、土浦中学の入学試験が始まりました。受験場に着くと受験生でいっぱい【志願者数559名、定員は4クラス200名】で、これではとても合格は無理だと思いました。学科試験はなく【1940年の春から学科試験は中止】、内申書、身体検査・運動能力検査と人物考査【口頭試問。1941年からは、学科試験抜きによる学力低下が懸念され、口頭試問の中に学科試験の要素も加味された。】とでした。運動能力検査には、跳び箱、高鉄棒での蹴上がりや懸垂などがありました。人物考査【受験生が多数のため24日から26日まで実施された。】では、「教育勅語」や「青少年学徒二賜ハリタル勅語の一部について質されたり、「長男なのに家業(父は大工)を継がないのか。」とも聞かれました。「横浜からシンガポールまでの海里」を計算する問題も出されました。私は、幼い頃病弱で、小学校2年の時に腎炎を患い、3年では関節リウマチで、殆ど登校できず、掛け算・割り算を学んでいなかったため、数学が大の苦手でした。この問題にはお手上げです。もう合格はないだろうとガツカリして真鍋の坂を下って帰ったのを覚えています。そんなわけで、合格発表【27日午後5時】を見に行きませんでした。近所の同級生が、「義ちゃん、受かってるよ。」と知らせしてくれたので、「まさか!」とびつくりしました。

土中生活

入学すると、国防色(カーキ色)の制服、戦闘帽、ゲートル巻きでの登校でした。正規の詰め襟の制服を着ている先輩を見ると羨ましい気もしましたが、土中生になった喜びには格別なものがありました。小桜町【現桜町4丁目】の自宅から徒歩で通学しましたが、先輩たちに会

うと必ず敬礼をしなければいけなかった。先輩を追い越さないように歩いていました。通学路の旧水戸街道沿いには小野座、霞浦劇場、銀映座と映画館が並んでおり(自宅近くには土浦劇場もあった。)、帰宅時にはその看板が目につきました。しかし、学校から生徒全員で「ハワイ・マレー沖海戦」などの戦意昂揚映画を何回か視に行ったことはあります。『決戦の夜空へ』1943年公開。予科練生の生活と民間人との交流を描き、挿入歌「若鷲の歌」は大ヒットを記録した。』は、主人公が土中生という設定で、本校でもロケが行われ、体育の授業のシーンでは先輩が跳び箱を跳んでいました。

授業が始まって驚いたのは、小学校では全教科を担当の先生が教えているのに、科目毎に先生が代わることです。みんな立派で、恐れ多い先生ばかりです。【真珠湾攻撃で太平洋】戦争が始まりましたが、英語の授業も従前どおり、変わることもなく行われていました。小学校にはなかった科目なので、新鮮な気持ちで学ぶことができました。同じく、小学校にはない「教練」も始まりました。朝会で、配属将校の先生がアメリカ機の模型を見せて、「これがボーイングB25爆撃機。」「これがロッキードP38戦闘機。」「と、空襲に備えての敵機識別の講話も行われ、その後の教練の時間にアメリカ機の機種を答えさせられるので、私たちは懸命に覚えめました。

教室では成績順に座席が決まります。成績が悪い順に前から並ばされています。お前は前から2列目だったな。」と何度もからかわれましたが、怖くて、先輩の

教室を覗きに行く勇氣はありません。しかし、その先輩方も「金蘭隊【居住する地域別に編成された学友区隊。旧土浦町の「金蘭隊」、桜川以南の「桜南隊」、旧真鍋町の「撫子隊」、旧石岡町の「南城隊」などがあつた。】で付き合いが始まり、いろいろ面倒を見てもらいました。また、卒業後も何かとお世話になり、先輩の有り難みをしみじみと感じています。

勤労動員

1年次(1942年度)には勤労作業もありましたが、授業も普通に行われていました。しかし、2年次になると勤労動員の日数が増えてきて、指定された農家や出征兵士の家へ出掛けました。霞ヶ浦航空隊へ行ったこともあり。1回の日数も7、8日間と長くなり、授業にも支障が出てきました。3年次には更に動員の日数が増え、クラス毎に班を編成して、勤労作業に当たりました。先生方は、引率や見廻り、作業監督です。1回の日数は4、10日で、勤労作業が終わると、1週間くらい通学、それからまた勤労作業となり、4・5年生と3年生とは、期間が重ならないように調整されていたようです。しかし、1944年7月から4・5年生が通年動員となり、「そのうちお前たちも通年動員になるよ。」という声も聞こえてきました。そして、その言葉どおり、翌1945年1月、私たち3年生も通年動員となり、27日に動員壮行式が挙行され、30日に霞ヶ浦海軍航空廠に入廠しました(当初は、横須賀海軍工廠に入る予定だったが、宗光太太郎校長が海軍と交渉し、霞ヶ浦海軍航空廠に変更になった。)。航空廠でもクラス毎に班を編成して、各部に配属されました。私は、飛行機部で、零戦の補助燃料タンクに防水加工を施した布を貼り付けて、燃料が漏らない

ようにする作業に当たりました。本来はジュラルミン製である筈のタンクは、ベニヤ板で作られています。隣の作業場では、土浦高女の女学生も作業をしています。小学3年生まで一緒に学んでいた同級生【4年生からは男女別学】もいますが、懐かしさどころか、その姿が眩しく見えます。中高津の東京電機にも何日か派遣され、ヤスリ掛けをひたすら練習させられました。海軍は、私たちを何としても工員の代わりにしようとしていたのです。

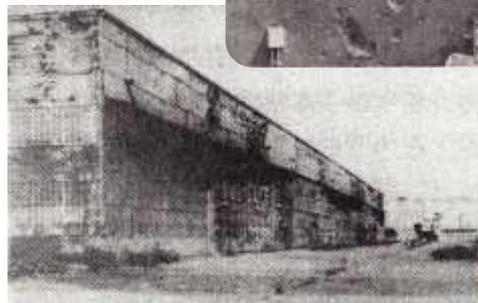
航空廠へは小桜町の自宅から徒歩で通いました。朝6時に家を出て、小松の坂を上り、右側の航空廠には7時前に着きました。昼には弁当が出ます。木製の弁当箱を当番が受け取りに行きます。ジャガイモやサツマイモが混じったご飯でしたが、だんだんご飯の量が少なくなると、時にはイモだけの時もありました。たまに出る魚は、いつも鰯(ニシン)でした。母の従姉妹が弁当部に勤務していたので、私が当番で行くと、いつも余分にに入れてくれました。それもお米だけのご飯で、分らないように上に海苔をふりかけてくれます。これには班員全員が感激し、頭を寄せ合って銀シャリを噛み締めました。

航空廠への空襲は2月16日から始まりました。空襲警報が鳴ると、全員が工具防空壕で生き埋めになった時の脱出用を1つ持って、防空壕に駆け込むのですが、私は、班長でしたので、班員の待避を確認するために、防空壕の最前列で待機しています。そのため、外の様子を見るのができませんでした。ある日の空襲では、P51の機銃掃射を目撃しました。防空隊の機関砲が応戦するのですが、全く当たりません。低空飛行をしてきたP51のパイロットが、こちらを見て手を

振っているのがはつきり見えませんでした。すると、戦闘機が1機、轟音とともに墜落、爆発炎上しました。「やっただぞ！」と叫びましたが、それは味方の零戦でした。烏山にあつた高射砲隊の誤射により、撃墜されたようです。後で墜落現場に行ってみましたが、遺体らしきものは、片方の飛行靴だけでした。



エンジンテスト場の被弾痕(右)と破壊された大型機組立工場(下)『第一海軍航空廠小史』より



同級生たちの一部は、笠間にあつた筑波海軍航空隊や土浦海軍工廠から福原に疎開した工場に動員されていました。筑波海軍航空隊では実弾の装填作業に従事したようです。まさに、最前線での作業です。福原の寮の環境は最悪で、蚤・シラミの襲撃に悩まされ、食事も粗末で、栄養失調者が続出したそうです。

終戦

8月15日の終戦の放送は、自宅で聴きました。茫然自失の状態で、8月20日には、航空廠に動員となっていた生徒の退廠式が行われ、9月1日には全校生徒が登校、始業式が行われました。登校してみると、5年生は4年修了で卒業しており、私たち4年生が最上級生になって

います。先生方から「お前たちが最上級生なのだから、しっかり下級生を指導しなさい。」と言われ、身の引き締まる思いがしました。

学校は始まりましたが、赤池での開墾作業や小麦の播種、甘藷掘り、援農作業などが続きました。たまの授業は、教科書の墨塗り【占領軍に対する思惑から、軍国主義に類する文字などを墨で塗り潰した。】です。10月からは授業が中心になりました。1945年9月15日現在で1405名、1946年9月9日現在で1638名。定員は1000名で、正常な授業が困難となり、1・3年生は午前の、2・4年生は午後の2部授業になりました。全校生徒が釘を1人3本宛て寄付する形で持ち寄り、桜川沿いの作業場で製作しました。1・2年生が材木運搬を、3年生が製作を、4年生が学校までの運搬を担当し、航空廠からの払い下げ機も加えて、何とか間に合いました。新しい教科書は配付されず、授業は、前学年で学習したことの復習や先生がひたすら講義をして板書したことを写すだけです。ようやく配付された教科書も製本されたものではなく、新聞紙大の折り目の入った紙で、ノートも配給でした。

進学・教員生活
1946年2月、「中等学校令一部改正(勅令第102号)」により、修業年限が5年に戻されましたが、私たちは、4年での卒業も可とされ、就職、上級学校受験、5年に進級という岐路に立たされました。私は当初、進級を希望していましたが、早稲田大がまだ受験できるということで、受験し、1次試験に合格、2次試験の日土浦駅に行くと、切符を売ってくれませんでした。切符も配給制で、「1次試験の時に配給分を使ってしまったから、ダメ

だ。」と言うのです。「受験なので何とかしてくれ。」と押し問答をしているうちに、列車は発車してしまいました。何とか切符を売ってもらって、受験場に行きました。大幅な遅刻ということで、受験は認められません。がっかりしているところ、近所の先輩が、「まだ受験できるから。」と法政大の願書を取り寄せてくれました。民主主義に関する英単語を覚えるなど、一夜漬けの受験勉強でしたが、運良く合格しました。4月末、私と同じように4月に受験して合格した12名が、赴任したばかりの今宮千勝校長から校長室で卒業証書を頂きました。

私たちの世代は、満州事変の前年に生まれ、日中戦争が始まった年に小学校に入学し、太平洋戦争開戦直後に中学校入学、敗戦の年度に卒業、と戦争に苛まれた学校生活を送りました。私は、中学3年で陸軍特別幹部候補生に志願し、合格していました。しかし、年齢の関係(早生まれ)で、1945年10月に入隊・入隊とされていたので、終戦で命を救われます。大学を卒業すると、教員の道を選びました。私たちは戦争で学びの機会を奪われただけに、子どもたちには学びの喜びを味わってほしいと思つたからです。また、大学時代に野球をしていましたので、戦後の混乱の中で、荒んだ子どもたちの心を、野球を通して少しでも明るく、健やかにしたいと思つていました。学校では野球部監督・顧問を長年続け、退職後は少年野球の手伝いもしてきました。

また、平成28年度の土浦市民野球大会では、選手・主将・監督として関わってきた小桜町チームが、昭和21年の第1回大会からその年の第70回記念大会までの連続出場を達成して、表彰を受けたの皆さんと喜びを分かち合いました。